The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南アジアの近代 : みずからを表現する歴史と語られない歴史
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学アジア太平洋論叢. 1997, 7, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

南アジアの近代

――みずからを表現する歴史と語られない歴史――

桑　島　　昭*

まえがき

1965年12月末、カルカッタのミネルヴァ劇場でウトゥポル・ドットの主宰する小劇場グループによって演じられた『海鳴り』(Kallol) を観たとき、1946年2月にボンベイで起こったインド海軍の反乱を描いた演劇に接した感動はもとより、観客席の横の通路に立って、あごに手をやりながら舞台を見つめ、次の場面に備える水兵姿の俳優と、座席でときに駄菓子を頬張る子供を連れた質素な服装の母親の劇に見入る姿との不思議な調和を通して、南アジアの歴史の一コマがいかに庶民の意識に定着していくかに思いが及び、心打たれた。

19世紀のインドに開花した「ベンガル・ルネッサンス」の流れを汲むミネルヴァ劇場は、1893年にギリシュチョンドロ・ゴーシュによって訳されたシェイクスピアの『マクベス』を上演し、1905～06年の民族運動の昂揚期、ベンガル分割反対運動のときには、ギリシュの二つの歴史劇『シラジュドゥッラ』と『ミル・カシム』を演じて人々の民族意識をゆり動かした歴史をもっている。(1)「シェイクスピアをベンガルの大衆に近づけた」といわれるドットも、1962年の中印国境紛争、1965年のインド・パキスタン戦争を経た後の非常事態下のインドの奇妙な静けさへの怒りを『海鳴り』に託して表現したかったのであろう。(2)

それから20年以上の年月を経た1980年代の後半、ニューデリーの歴史家が一次資料を駆使して試みたインド海軍の反乱の分析は、イギリス帝国の軍隊が「反乱」を起こすことができた事実の大きな意味を認めながらも、大衆の意識への劇的な

*大阪外国語大学　地域文化学科　アジア・アフリカ講座

衝撃と、主要な民族主義勢力であったインド国民会議派と植民地支配者イギリスの政策への現実の効果とを混同すべきではないと戒めた。(3)

短期的な政策の決定過程の分析としては、この歴史家の指摘するとおりかもしれない。しかし、一見、大衆の意識への劇的な衝撃と見えるものが、実は、彼らの日常的な生活感覚から形成された政治的な意識であることも多い。インド海軍の反乱に際して水兵に水や食糧の支援の手をさしのべたボンベイ市民の行動は、当時進行していたボンベイ州議会選挙ーそこでは、成人人口の4分の3の人達に選挙権はなく、現役の水兵もその権利を奪われていたーへの批判でもあった。逆に、1965～66年に、演劇を通して演出者と俳優から大衆へと伝わった歴史意識もまた、会議派が大幅な後退を余儀なくされたインドの第4回総選挙（1967）の結果を暗示するものであった。

ここでは、公文書の文面からはもれてしまう南アジアの人々の歴史意識の形成と政策への「現実の効果」を、二次資料の伝記、とくに自伝類を手がかりとして考え、南アジアの近代史の流れを、できる限りおなじ視角からたどろうと試みた。

(1) Ahindra Choudhuri, "The Theatre (1858-1919)", Atulchandra Gupta (ed.), *Studies in the Bengal Renaissance*, Calcutta, 1958, pp. 302-303.

(2) Subil Chatterjee, "Utpal Dutt-rebel with a cause", *Times of India*, 20 August 1993.

(3) Sucheta Mahajan, "British Policy, Nationalist Strategy and Popular National Upsurge, 1945-46", Amit Kumar Gupta (ed.), *Myth and Reality: The Struggle for Freedom in India, 1945-47,* New Delhi, 1987, p.80.

1　近代ヨーロッパとの接触ーネパールの近代

「いまや、すべては終った。5人の皇后がサティーの準備をした。しかし、最年長の女性が、幼ない子供達を育てなければならないという理由で、2人の皇后にその名誉に浴することを思いとどまらせようとした。しばらく抵抗したあとで、ついにこの2人は彼女の思慮深い助言に従った。…サティーとして自分の身を犠牲にすることを決めた残る3人の皇后は、繰返し思いとどまるようにと懇願され

たが、自分の決意を覆えそうとはしなかった。このため、三つの薪の山が作られた。一つはマハーラージャと最年長の皇后が分ち合って使用するために、その他の二つは残る2人のサティーのために。」[1]

サティーの意味は、「夫に誠実な妻」、そして、「亡くなった夫を焼く薪のなかに妻が身を投じて殉死すること」である。1829年のインドにおけるサティー廃止令は、イギリス植民地支配の確立期に成立した都市中間層の成立を背景として展開された「ベンガル・ルネッサンス」の先駆けをなすものであった。一方、1846年に血のクーデタを敢行してネパールの支配権力を掌握し、シャハ王朝を背景に押しやり、その後の約1世紀にわたるラナ家支配の基礎を築いたジャング・バハドゥル・ラナも、サティーの廃止に傾いていたといわれるが、ネパールにおいてサティーが廃止されたのは、第1次世界大戦期に「自由な」世界を見たゴルカ兵が帰ってきた1920年のことである。[2] ここに引用したのは、ジャングの息子パドマによって書かれた『ジャング・バハドゥル伝』の最後の部分であり、1877年2月25日に生涯を閉じたマハーラージャ、ジャング・ハバドゥル・ラナの葬儀とそのときのサティーの場面を描いている。

ところで、ジャング・バハドゥル・ラナは1850年1月15日にカトマンズを離れ、途中インドに立寄ったり、船による長旅であったために実際のヨーロッパ滞在期間は5ヵ月足らずであったが、約1ヵ年に及ぶヨーロッパ訪問の旅に出た。この旅行のお膳立てをしたのはもちろん、イギリスである。帰国したジャング・バハドゥルは、イギリスの議会制度を真似てカウサルという名の232 名から成る審議機関を設け、1854年にはナポレオン法典に似た国法を制定した。実際に、ラナの支配者が議会制度の導入を提案したのは、1948年のことである。ジャングのイギリス訪問の結果は、1857年のインド兵の反乱に際して、彼が自分の軍隊をインドに送って反乱の鎮圧に当らせたことに示された。

日本の遣欧使節に先立つこと21年、ジャング・バハドゥルは、宗教上の理由から、船のなかでは、自分と自分の持ち物がヒンドゥー以外の者によって触れられないように気を配り、果物しか口にせず、港に着いたときだけ調理された物に手をつけた。この旅行には、4人の料理人、12人の家内サーバント、さらに、これ

らの人達を助けるための10人の者が随行したが、伝記のなかには彼らについてのこれ以上の記述はない。「自分自身と自分の家族に権力を集中することによって、ネパールの法秩序のために安定した基礎を築いた」[3] といわれるジャングを陰で支えた料理人やサーバント、「サティー」となった3人の皇后にとって、近代ヨーロッパとネパールとの出会いはどのような意味をもっていたのであろうか。「ベンガル・ルネッサンス」が照し出す光にもかかわらず、彼らが、そして、19世紀の南アジアの民衆が背負っていたのは、二重の「近代」が作り出した現実の重みであった。

(1) Pudma Jung Bahadur Rana, *Life of Maharaja Sir Jung Bahadur of Nepal,* Kathmandu, 1980 (First published 1909), pp. 308-309.

(2) Prem R. Uprety, *Nepal-A Small Nation in the Vortex of International Conflicts, 1900-1950,* Kathmandu, 1984, p. 93.

(3) Rishikesh Shaha, *Essays in the Practice of Government in Nepal,* New Delhi, 1982, p. 94.

2 「コミュナルな」自覚と「民族的」自覚

「(ヒンドゥーの) ザミーンダールは、ヒンドゥー・ムスリムにかかわらず、すべての農民からカーリー神の祭のために税を徴収した。税は地代とともに支払われ、地代と同様に強制的であった。税を払わなければ地代を受け取らなかった。

カーリー神の祭の機会に、ザミーンダールのカチャリ (オフィス) で催しが行われた。有名なジャットラ (地方芝居) 劇団が、一週間かけて歌を聞かせ、大いにベンガルを讃えるのであった。何千人という数の子供、老人が一晩中起きていて、歌や劇を楽しんでいた。広場や農場で一日中、劇はビーマ、アルジュナを讃えていた。見る者、聞く者はほとんどムスリムであった。というのは、この地域ではムスリムが多数であったから。…

ついに、私は見世物を見に行くのをやめた。おそらく、誰かが禁じたからというよりも子供心の屈辱感からであった。すべてのジャットラ、劇の集まりは、カチャリが準備したものであり、ボッドロローク (紳士階級) には座席が用意されたが、ムスリムは立ったまま見なければならなかったからである。」[1]

農民党（Krishak Praja Party）の指導者であり、ジャーナリストでもあったアブル・モンスル・アフマドは、第1次世界大戦の頃のバングラデシュ農村の思い出を語り、彼自身の「コミュナルな」意識がベンガルの農村社会、地主制度とのかかわりのなかでいかに形成されていったかを記している。

1905年のベンガル分割に抗議する形で展開されたスワデーシー運動において、その運動を支えた中間的土地保有者層、そこから生まれた知識人をふくむヒンドゥーの「紳士階級」と労働をする農民のあいだに深い軌裂があったことは、すでに、インドの歴史家によって指摘されている。(2) 独立直前の1946年初めにおいてすら、ベンガルの会議派の指導者の1人は、会議派がムスリムの大衆とのあいだに接触をもっていないことを認めざるをえなかった。(3)

1911年12月におけるイギリスによるベンガル分割撤回の声明は、分割後にダッカを中心とする東ベンガルの経済的地位の向上を期待したムスリム指導層のあいだに対英不信感を植えつけ、ベンガル分割に反対したヒンドゥーの「紳士階級」に近づけた。しかし、やがてベンガルのムスリム農民を基盤とする「民族主義」政党、農民党が誕生し、この党は、1937年州議会選挙を経てベンガル州の政権の座に就いた。それは、のちのバングラデシュ独立（1971）に連なる流れでもある。その意味では、ここに紹介したアブル・モンスル・アフマドの幼い頃の体験は、1970年代のバングラデシュ誕生への序章でもあった。それは、「コミュナルな」意識の形成として片付けることのできない歴史的な体験であった。

(1) Abul Mansur Ahmad, *Amar-Dekha Rajnitir Panchas Vochor*（私の見た政治の50年）, Dhaka, 1975, p. 25.

(2) Sumit Sarkar, *The Swadeshi Movement in Bengal 1903-1908,* New Delhi, 1973, pp. 515-516.

(3) Sarat Chandra Bose to Vallabhbhai Patel, 3 January 1946, Durga Das (ed.), *Sardar Patel's Correspondence, 1945-50, Vol. 2,* Ahmedabad, 1971, pp. 385-386.

3　1915年ー日本・アジア関係史の転換点

「比騒動に於て、我援助の為に、英人の態度は確かに一変した。表面のみにても吾々に敬意を払うやうになった。支那人や馬來人の態度も変った。総ての人種が日本人の前には道を譲った。此時程吾々が肩幅広く感じた事はない。

然し、日本人を東洋の覇王として尊敬し、信頼してゐた印度人は何(ど)ういう感情を持ったであらう。日本人頼むに足らず、日本人も吾々の敵であると印度人は思はないであらうか。これと同時に、縦令(たとへ)一時的にもせよ、英領土の一部を占領して、新架坡島の中央に日章旗を立てたといふことは何を意味するであらう。アレキサンダー・バラックは新架坡島の中心地である。新架坡は南洋の中心地である。」[1]（句読点と漢字のいくつかを改めたほかは原文のまま）

1915年２月15日、シンガポールにおいて第５軽歩兵連隊に属するインド人兵士が反乱を起こした。[2] 反乱は数日にして鎮圧されたが、シンガポール在住の日本人は義勇隊を組織し、街の警備に当り、日本の第３艦隊は巡洋艦の音羽と対馬をシンガポールに入港させ、とくに、音羽の陸戦隊はアレクサンドラ兵営の奪回でイギリス側に協力した。

すでに、日露戦争における日本の勝利に刺戟されて、多くのインド人革命家・民族主義者が日本に渡ってきたが、おなじ日露戦争の結果として生まれた第２次日英同盟（1905）、そして、第３次日英同盟（1911）の下で、日本の警察はこれらインド人の動きを監視していた。インド兵の反乱の鎮圧への参加は、日露戦争における日本の勝利がもはやインド・ナショナリズムへの励ましのメッセージではないことを証明することになった。

『南洋日日新聞』の記者であった佃光治は、一方で、日本の反乱鎮圧への参加による日本人としての「肩身の広さ」を喜びながらも、この事実が日印関係、そして、日本とアジアとの関係における歴史的転換点を示すものではないかと予測した。このように鋭い歴史の予測を可能にしたのは、佃が第１次世界大戦を契機とする日本、およびシンガポールの日本人社会の性質の変化を注意深く観察していたからであろう。

佃の予測を裏付けるように、インドの民族主義者達の日本を見つめる眼はきび

しくなった。1916年に來日したラビーンドラナート・タゴールの日本への警告はよく知られている。1915年に日本を訪問したが、日本滞在を必ずしも楽しまなかったラーラー・ラージパト・ラーイは、1926年のILO第8回総会にインドの労働者代表として出席し、女性の深夜労働の禁止を定めた1919年のワシントン条約を日本が批准しないために、インドの労働者は女性の地下労働の禁止など彼らの要求を提出しにくくなっていると演説した。何故なら、「アジアのもっとも進んだ国が古い状態になお固執しているからである。」[3] すなわち、ラーイは、日本が「女工哀史」の道を歩む限り、[4] インドの労働者の行く手を妨げると訴えたのである。このラーイの発言は日本に伝わらなかったように見える。彼が提示したインドと日本のかかわりの視点は、1930年代の日本において展開された日本資本主義論争における「印度以下的労働賃銀論」の比較の視点に反映してはいない。20世紀初頭、バール・ガンガーダル・ティラクと並ぶインドの「過激派」の指導者とみなされていたラーイは、1920年代半ば、「ヒンドゥー民族主義」に傾きつつあったが、日本の近代史を見つめる眼はむしろ鋭くなっていたのである。

ちなみに、1913年生まれのバングラデシュの知識人で政治家のカムルッディン・アフマドの少年時代の思い出も、第1次世界大戦期から1920年代にかけてのベンガル社会を通して見た「先進国」批判となるであろう。アブル・モンスル・アフマドと同様にムスリムであるが、ヒンドゥーの祭を楽しんだ彼は次のように回顧している。

「ヴァイサク月（陽暦4～5月）の市では土やガラスで作られたいろいろな人形や遊び道具が売られていた。これらのおもちゃは、たしかに日本製のおもちゃのようにきれいではなかった。しかし、子供達にこうしたおもちゃが与えてくれた喜びを、今日の子供達は外国製のおもちゃから得ることはできない。特定の階級の子供達のために存在する現在の高価なおもちゃは、もはや、すべての人におなじ笑いを与えてはくれない。」[5]

(1) 佃光治『南洋より』好文館（シンガポール）1916年 24-25 ページ。

(2) Sho Kuwajima, *Indian Mutiny in Singapore (1915)*, Calcutta, 1991.

(3) V. C. Joshi (ed.), *Lala Lajpat Rai-Writings and Speeches, Vol. 2*

(*1920-28*), Delhi, 1966, p. 313.

(4) 中山和久著『ILO 条約と日本』岩波新書 1983年 37ページ。

(5) Kamruddin Ahmad, *Banglar Madhyavitter Atmavikash*（ベンガル中産階級の自己形成), *Vol. 1*, Dhaka, 1382（ベンガル暦), p. 23.

4 戦後の自由への模索

「冬のことだった。ぼろぼろの服を着た多くの貧しい人達が、職を求めてインドに行こうとしていた。父は彼らの1人に尋ねて、ぼろの服を求め、その男の袋に入っていた服を自分で引張り出した。その後、首相（チャンドラ・シャムシェル）のもとに次のような手紙を添えて服を送った。『これが閣下の人民が冬に着ている普段着です。閣下が着ている物と比較して下さい。私がこうした汚いぼろを送ったことについて、閣下への不遜と解釈されないようお願いします。

この小包を開けば、官邸内は騒然とするのではないかと思いますが、私は人民がどのような状態の下にあるかを閣下に理解していただきたいのです。』」[1]

第1次世界大戦中、560 万人の人口からなるネパールは、約20万人のゴルカ兵を海外に送り出し、うち2万4千人以上が死傷、行方不明となった。しかし、兵士募集への抵抗もはげしく、入隊後の離脱者も少なくなかった。加えて、多くの若者が戦場に出たために農業生産は停滞した。[2]「欧州大戦」はネパールの民衆の生活を巻きこむ世界大戦であった。

1923年12月21日、ネパールとイギリスとのあいだで友好条約が結ばれ、イギリスはネパールの独立を「明白」(unequivocal) なことと確認した。在任1年にも満たない首相デワ・シャムシェルを隠謀をめぐらせて追放し、政権の中枢に就いたチャンドラ・シャムシェル（在任期間 1901-1929)は、第1次世界大戦後、その政治力をネパールがイギリスから対等の地位を獲得するために用いたが、それを可能にしたのも、大戦期のゴルカ兵と後に残された民衆の犠牲があったからである。[3]

ここに引用したのは、1959年にネパールの首相となったB.P.コイララが語る父クリシュナ・プラサドの思い出である。彼は実業家であり、社会改革運動の指導

者でもあった。クリシュナ・プラサドは、2人の妻をもっていたが、妻と姉妹の力を借りてネパールの女性組織の結成に加わった人である。[4] このぼろの服を受け取ったチャンドラ・シャムシェルはもちろんクリシュナ・プラサドに逮捕状を出したが、彼は友人の知事のはからいでインドに逃れることができた。1世紀にわたるラナ体制のなかでももっとも強力な首相の1人と考えられているチャンドラ・シャムシェルに臆することなく、ぼろの服を送ることができたクリシュナ・プラサドの行動にも、第1次世界大戦を経たネパール人の自覚がひそんでいた。そして、このような自覚は、国王による強権政治であるパンチャーヤト体制を倒すことができた、そして、少なくともカトマンズ渓谷地域では大衆蜂起であった「1990年の革命」へと連なる流れのなかに位置づけることができる。[5]

他方、インドにおいては、戦争でイギリスに協力しながら、戦後に得たものは州段階における部分的自治でしかなかった。このため、第1次世界大戦後のインドは、トルコにおけるカリフ制廃止の危機をインドの自治の問題に結び付け、ガンディーの指導の下、第1次非暴力抵抗運動を展開した。その後、ガンディーは、1921年後半にはケーララで起ったムスリム農民マーピッラの武装反乱の方向に批判的となり、おなじ年の11月、イギリス皇太子のボンベイ到着に抗議する運動が暴動となったとき、断食をもってこれに対峙した。そして、1922年2月5日、連合州チャウリー・チャウラー村で農民が警察官22名を警察署に閉じこめて焼き殺したとき、ガンディーは、インドの大衆がいまだ真理（サティヤ）を身につけていないと判断し、市民的不服従運動を中止し、チャルカー（手紡ぎ器）を廻す仕事に戻るように指示を出した。これまで会議派の活動、また、これと分ちがたいキラーファト（カリフ制擁護）委員会の活動に従事していた指導者や青年層の失意は大きかったが、会議派は全体としてガンディーの運動に取って代る道を用意することはできず、わずかに従来ボイコットしてきた議会への参加の道を、その後、認めるにとどまった。ガンディーの中止の指示に不満を抱いた青年層の一部は、大戦前のテロリズム運動の延長上にある革命運動、あるいは社会主義運動に入っていった。1931年に絞首台に上った革命家バガト・シンもその1人である。以下は、ベンガルの地方都市でガンディーの中止の指示がどのような形でキラーファト運動に従

事する1人のムスリムの若者ムハンマド・アブドゥラ・ラスールのもとに届いたかを示す文章である。

「釈放されたある日、ボルドマンに行き、会議派とキラーファト委員会の県支部のオフィスで話しをした。当時、そこでは「監獄を埋めつくせ」運動が進行していた。

…この県のメマリ・バーザールで外国衣料・大麻・阿片の店をピケットすることを決めた。地域の高等学校に出かけて学生と教師の協力を得たいと希望をのべると、学生の反応は大変良かった。実際、毎日、10人の学生を連れて行ってピケットをした。毎日、おなじグループを連れて行くのではなく、別のグループを順ぐりに連れて行くことになった。校長は当初少し躊躇したが、あとでは反対しなかった。活動は続き、毎日、新しいグループがやって来た。

しばらくして、2月半ば、何気なくグループを連れて行くために学校に行くと、校長に呼ばれて、こう言われた。「いまさら、どうして学生を洗脳するのだ。ガンディージーはもう運動をやめてしまったぞ。」校長は英字紙『ベンガリ』を持ってきて、このニュースを見ろと言った。私は見て驚いた。ニュースを読んで唖然とした。このあと、どうなるのか、どうしようもなかった。

その頃、ラジオは無かった。バーザールにいかなる日刊紙も無かった。学校に唯一つ『ベンガリ』紙が置いてあり、そこにニュースが出ていた。この問題で教師としばらく話した。彼らもニュースを読んで、あまり喜んではいなかった。」(6)

ガンディーの運動中止指令の受けとめ方について、ガンディーを直接に知る人、少なくとも早い段階でそのニュースを知ることができた人と、そうではない多数の人達とのあいだで大きな相違があったのではないかと想像させる文章である。チャウリー・チャウラー事件とその直後のガンディーの決意がインドの近代史のうえで占める位置は大きい。まもなく逮捕されたガンディーは、1922年3月18日に法廷の被告席での供述のなかで、市民的不服従と非暴力の思想の核心部分を語り、裁判長や傍聴席にいた人々に衝撃を与えた。供述を終ってしばらくの間、針1本落ちても聞こえるような沈黙が法廷を覆ったといわれている。(7)

同時に、法廷の外にいて、ふとした機会に「運動はすでに終っていた」と知った運動への参加者達に、表現しがたい屈折した思いがつきまとったとしても不思議ではない。ここに引用したムスリムの青年ラスールにしても、農民運動に次の活動の場を見出すまでに様々な経験をくぐらなければならなかった。そして、ガンディーと道を異にした者も、1920年代以降の南アジアの歴史を形作るうえで否定しがたい独自の役割を果たしたのである。ガンディーの「カリスマ」の下、一糸乱れずという南アジア近代史像は、歴史の現実から程遠い。そこに、南アジアの社会がかかえる問題の深刻さも指摘できるが、逆に、社会の包容力と可能性をも知ることができるのである。

(1) Bhola Chatterji, *B. P. Koirala-Portrait of a Revolutionary,* Calcutta, 1990, p. 48.

(2) Uprety, *op. cit.,* p. 95, p. 104 and pp. 135-146.

(3) チャンドラ・シャムシェルについては、河口慧海『チベット旅行記（五)』講談社学術文庫 1992年 138-150 ページを参照。

(4) Kiran Mishra, *B. P. Koirala-Life and Times,* New Delhi, 1994, pp. 2-3.

(5) William Raeper and Martin Hoftun, *Spring Awakening-An Awakening of the 1990 Revolution in Nepal,* Penguin Books India, New Delhi, 1992, p. 115. 2人の著者は、1992年7月31日のネパールの飛行機事故で亡くなった。

(6) Muhammad Abdullah Rasul, *Grame Gramantare*（村から村を越えて), Calcutta, 1985, p. 10.

(7) Balmukund Agrawal, Azadi ke Mukadame (1885-1946)(独立をめぐる裁判), New Delhi, 1995, pp. 83-88. なお、饒平名（よへな）智太郎編『ガンヂ審判の日』(改造社出版）は、この裁判が行われた1922年に出されている。

5　1929年世界恐慌とインドの解答

「集会のあと、私はアーシュラムに帰るために外に出た。すると、女性達がやって来て、足に手を触れて敬意を表わし、このように言った。ー「もしも、あなたが行ってしまえば、刈り取りは出来ないでしょう。男達は誰も近くに行こうとしません。どうぞ戻って下さい。一緒に居て下さい。一緒に行って刈り取りをしま

しょう。」

私は戻った。戻ったあとで、翌日早朝、100人の女性が刈り取るための鎌を持ち、収穫物を縛るための紐を携えて我々と一緒にいた。私が刈り取りを始めた。女性も刈り取りを始めた。…

このようにして運動は始まった。私は監獄にぶち込まれていた。…

最後の日、とうとう警官は掘られた井戸を埋める準備をした。井戸を埋めなければならないと言った。女性が立ち塞がった。それぞれの井戸のそばに6人の女が立った。10の井戸がある。60人の女が立っている。警官が近づいて来て、井戸を埋めると言った。女性は結構だと答えた。井戸を埋めるというのに、それぞれの井戸のなかに5人の女が跳びこんだ。5人づつの女が井戸のなかに入って、さあ、井戸を埋めたいのなら埋めろと叫んだ。5人づつの女がすべての井戸のなかにいる。これでは、到底井戸を埋めることはできない。警官はその場所から立ち退いた。逃げてしまったのだ。後から、警官にたいしてキャンプを閉じて去れという命令が届いた。」(1)

1929年の世界恐慌に際して、植民地宗主国の矛盾は植民地にしわ寄せされた。プランテーション経済に依存するスリランカに与えた影響も甚大であった。しかし、1928年に成立した全セイロン労働組合会議は、プランテーションに働くインディアン・タミル労働者を救済するよりも、19世紀以来南インドから移住してきた彼らを排除する方向で問題の解決をはかろうとした。こうして、1931年に、インディアン・タミルを基盤として全セイロン農園労働者連合(All-Ceylon Estate Labour Federation)が結成されたが、それは、1929年の世界恐慌にたいする南アジアの底辺に生きる人達の解答の一つであった。(2)

インドにおいても、農産物価格は下落し、農民の不満は会議派に寄せられ、すでに1920年代に農村にいたるまでの組織的枠組みを用意していた会議派は、1930年代に農民層のあいだに実質的に浸透するにいたった。会議派の活動と連動する形で1936年には全インド農民組合(All-India Kisan Sabha) も誕生している。

なかでも、スワーミー・サハジャーナンド・サラスワティーという個性豊かな指導者に恵まれたビハール州は、1930年代のインド農民運動の中心地となった。

ここに引用したナワーダー県レーオラー村においてジャドゥナンダン・シャルマーの指導の下に展開された土地取り戻しの運動、いわゆるバカーシュト・サティヤーグラハは、ビハール州の農民運動を象徴する運動である。レーオラー村の女性が警官から土地を守ったのは、1939年1月14日のことである。そして、この女性の行動が最終的にレーオラーのサティヤーグラハを勝利に導いた。1930年代のビハール州農民運動が主として上層、中層の農民によって支えられていたことはサハジャーナンド自身認めているが、この運動は各地で女性の参加なしには成り立ち得なかった。それ故、この農民運動において、女性が、そして土地を持たない農業労働者が何を見、何を切り拓こうとしていたかに視点を据えるとき、1930年代の問題は現在に連なってくる。

ところで、両大戦間期のインドでは、女性が民族運動の前面に登場し、酒屋や外国衣料を売る店のピケットに参加することは当り前のこととなっていた。また、マーガレット・カズンズ（アイルランド人女性）やサロージニー・ナーイドゥー（詩人、1925年会議派大会議長）などによる女性参政権運動の結果、1926年までには、インドのほとんどすべての州で女性は男性とおなじ条件で選挙権を持つようになり、女性の州議会議員が登場した。(3) にもかかわらず、南アジアの将来を左右する1946年1月～4月のインドの州議会選挙において、女性の有権者は全体の15％に過ぎず、ビハール州の場合、無風選挙区以外の地域で投票所に出かけた女性の比率は登録有権者の22.5％、とくに農村部の選挙では、女性の有権者の約9人に1人しか一般選挙区の投票に出かけず、ムスリム選挙区でもその割合は約7人に1人であった。(4) ベンガルでは、ふだん外出することの少ない地主の女性が、使用人の女性を身代りに投票所に行かせている。(5) なによりも、国家の独立が課題となったこの選挙において、南アジアの社会のこのような現実のなかから出た訴えは、どのように吸収することができたのであろうか。

この点では、女性のための留保議席を扱った1研究者の指摘、つまり、女性指導層の議会への登場と社会改革立法の作成、女性の市民的不服従運動への参加の拡がりという「中味のない外殻」、そして、家庭のイデオロギーが女性の真の状態を見えにくくしたという結論は的を得ているかに見える。(6) しかし、それは問

題の一面であり、村落その他の草の根レベルの女性が、パルダー（カーテン）の外に出て選挙担当官の前で自己の選挙資格を主張するにいたる過程は、紛れもなく、社会の真実をみずからの眼で知る過程であった。

(1) ジャドゥナンダン・シャルマーに聞く、ガヤーにて、1966年4月10日－11日。

(2) Visakha Kumari Jayawardena, *The Rise of Labour Movement in Ceylon,* Durham, 1972, p. 343.

(3) Asharani Vhora, Mahilaen aur Swarajya-Swatantra Sangram men Mahilaen ki Bhumika (1775-1950)（女性と独立－独立闘争における女性の役割), New Delhi, 1988, p. 134.

(4) Nandalal Sinha, *Report on the Elections in Bihar,* Patna, 1946, p. 22.

(5) Moni Singh, *Jiban Sangram*（生涯の闘い), Dhaka, 1983, pp. 73-74.

(6) Gail Pearson, "Reserved seats-women and the vote in Bombay", J. Krishnamurty, *Women in Colonial India-Essays on Survival, Work and the State,* Delhi, 1989, p. 217.

6　第2次世界大戦と南アジア－戦争と生活

「真夜中、7人の遺体を伴った行進が始まった。この若者の死に涙を流さぬ者があろうか。葬列の所々に火がともり、遺体は花で飾られ、無数の人達が後をついて行った。すべての人の眼に怒り、すべての人の心に苦しみがあった。こうした光景を見て、人々の忍耐は限度に達した。12日にパトナーで完全なハルタールが行われたというだけでは十分ではない。その日、パトナー市にはイギリスの支配が存在しなくなった。リキシャーと馬車は動いていなかった。学生もいまや指導をしていなかった。指導は、リキシャーや馬車を引く人、そして政治といえばイギリスが我々の敵であることは心得ているような人達の手に移った。

…革命は来なかった。そのための努力をしなかったからだ。しかし、疑いもなく革命の雰囲気がそこにはあった。都市の人民の力は古い統治を終らせた。だが、終らせたにとどまり、真空状態となった。市の働く者を煽動し、ここまで到達させた学生達は、みずから彼らにいかなる道も示すことはなかった。翌日（13日)、1人の紳士が熱烈にこう叫んでいた。「いまや、革命は前進する。学生は村に行

き、村に革命の火がともされよう。ガンディージーはすべてを知っていた。」

…12日の夜、運動に参加した者が望んだならば、人々から10万から20万ルピー、何千マウンドもの食糧を蓄えることができ、それによってリキシャーや馬車を引く人、その他働く者に食事を用意して、さらに何日かハルタールを続けることもできたであろう。…しかし、我々の指導者達は、すべての者が指導者、これが革命であると理解していた。

14日、熱は冷めた。…多くの学生は前日にパトナーを離れていた。この日（14日）、カレッヂは1ヵ月間閉鎖され、10時までに寮を引き払うよう指示が出されていた。…3日目（14日）、リキシャー、馬車を引く人達は黙々と自分の仕事に戻って行った。しかし、彼らは学生達にはきびしい言葉を浴びせていた。…その日の夕方、戒厳令が出された。」(1)

第2次世界大戦が始まったとき、インドには、戦争に協力して戦後に自治を得られなかった第1次大戦の苦い経験があった。そこで、大戦期のインド国民会議派の立場は、イギリスがインドに独立を与えてこそ、反ファシズム戦争においてイギリスに協力しうるというものであった。しかし、日本軍がビルマを占領した1942年3月にいたってもイギリスが実質的な譲歩を拒むなかで、会議派全国委員会は、1942年8月8日、ボンベイにおいて、イギリスの即時撤退か、さもなくば、ガンディーの指導の下で大衆的不服従をという「インドを立ち去れ」（Quit India）決議を採択した。ガンディーをはじめ会議派の主要な指導者は翌日早朝に逮捕されたが、これに抗議し、インド独立を求める大衆運動は全国に及んだ。

ビハールの州都パトナーでは、8月11日、州政府の建物（セクレタリアート）に、独立後のインド国旗の原型となる三色旗を掲げようとした7人の学生が警察の発砲の犠牲となった。ここに引用したラーフルの回顧は、11日深夜から14日までのパトナーの緊迫した場面、とくに、リキシャーや馬車を引く人達のハルタール（罷市）への参加と彼らの思いを目撃者の筆で描いている。都市の底辺に生きる人達は、第2次世界大戦の性格をめぐって指導者のあいだで闘わされた議論よりも、戦争に伴う物価の高騰、食糧の不足、犯罪の増加といった身の廻りの現実から出発し、戦争と植民地支配への怒りをハルタールへの参加を通して表わそう

とした。

この文章を読むたびに眼に浮かぶのは、それぞれの時期におけるリキシャーワーラー（3輪自転車の力車を引く人）をなかに入れたパトナーという都市の光景、自動車の増加をふくむ社会的、経済的変化のなかでのリキシャーワーラーの仕事と生活、教育を受けた社会層とリキシャーワーラーとのかかわり方である。

1982年にガンジス河に橋がかかり、職を求めて北ビハールからパトナーに移動してくる人々が増加し、1980年代末から90年代初めにかけて、パトナーの人口の10分の1はリキシャーワーラーであるといわれた。(2) 1971年センサスのために『パトナー市』(3) を著したサッチーダナンド教授が、1987年8月に語った所に寄ると、当時、免許を持つリキシャーワーラー3万人、無免許のリキシャーワーラー2万人ということであった。風評と比べると控え目の数字ではあるが、都市人口中に占めるリキシャーワーラーの比率はそれでも大きい。リキシャーワーラーの日収は約25ルピー、うち10ルピーを食費に使う。収入の多い者は40～50ルピーをかせぐという。また、特定の医者やホテルの斡旋で収入の一部をかせぐ者もいる。彼らの一部は共産党の指導する労働組合に入っているが、2日以上のストライキをするのは無理だといわれる。1942年8月14日、パトナーのハルタールの3日目に仕事に戻ったリキシャーや馬車を引く人達の生活条件とほとんど変らないことも偶然とはいえない。

1990年8月、後進階層にたいする中央政府公務員職の留保枠の比率の拡大は自分たちの就職の機会を挟めるとし抗議したデリーの学生達ーその多くがビハール州出身者ーの指導層は、「V．P．シン（当時のインド首相）の最終的な願いは、教育を受けた者にリキシャーを引かせることだ」というスローガンを掲げた。「すべての者に職を」と訴える学生達と彼らのハルタールによって何日もの仕事を失うリキシャーワーラー達との距離もまた、1942年8月とあまり変っていない。

「1942年の革命」といわれる「インドを立ち去れ」運動のインド独立運動史上における意義についての評価は、今後とも大きく揺らぐことはないであろう。「革命」の課題は、1947年8月15日のインド独立で基本的には達成された。しかし、ラーフルの回顧に描かれた教育を受ける機会に恵まれた社会層と、都市、農村の尨大な底辺層とのあいだの溝を埋める課題はいまも残されている。

物価の値上りと食糧の不足は、パトナーに限られてはいなかった。1942年３月８日の日本軍のラングーン占領後におけるビルマ米輸入の停止という条件の下で、350万人の死者を出したといわれる1943年のベンガル飢饉の最大の犠牲者は土地を持っていない農業労働者であった。日本軍は、飢饉前夜の1942年12月と飢饉のさなかの1943年12月、カルカッタを爆撃し、食糧危機に伴う混乱に拍車をかけている。

1942年に、日本軍の爆撃は、ベンガル湾沿いに、現在のアーンドラ州のヴィシャーカパッタナムとカキナダ、マドラース、そして、スリランカのトゥリコナマレー、コロンボにまで及んでいた。マドラースで発行されている『ヒンドゥー』紙は、1992年８月16日付の記事において、日本軍占領下のアンダマンの住民の痛ましい犠牲を思い起こすと同時に、日本軍の空襲を怖れて官庁がマドラースを離れて移動したために、農村部の生活必需品の価格が都市並みに上昇し、マドラースに踏みとどまった人達にとっても、数少ない茶店と商店が特定の地域に開かれているだけで、コーヒーと砂糖は得難くなり、お茶はおごれる紳士達のぜいたく品になってしまったと回顧している。

パトナーのリキシャーや馬車を引く人達の行動は、第２次世界大戦期の南アジアの民衆の苦難を象徴的に表現していたのである。

一方、1939年９月13日、ネパールの首相ジュッダ・シャムシェルはイギリス首相チェンバレンに戦争協力を申し出た。大戦中、ゴルカ兵がヨーロッパからアジアに及ぶ広汎な地域で戦闘に参加したほか、ネパール国軍もまた、宗教的な理由から海を渡らないという範囲ではあったが、インドとビルマに派遣された。しかし、第２次世界大戦期にふたたび約20万人の兵士を戦場に送ったネパールの丘陵地域の人々は、そのために生産活動の停滞に苦しみ、それは全国的なインフレーションと生活必需品の不足を招くこととなった。(4)

このような状況の下、1941年１月１日、インドの北西辺境州（現在はパキスタンの一部）のコーハートで、ネパール国軍の第２ライフル連隊が暴動を起こした。暴動の直接的原因は、現金で支払われるべき手当が糧食の追加という形で与えら

れたことにたいする不満にあるといわれ、暴動に加わった兵士にインタビューしたネパールの歴史家もおなじ解釈をしている。[5] だが、暴動の背景には、ラナ体制維持への欲求からイギリスへの戦争協力を申し出て、国軍を国境の外に敢えて送った支配者の一存と、戦争のもつ意味を確かめられないまま異国の地で生活する兵士達の意識のあいだのずれがあったように思われる。

1941年2月18日、カトマンズでは、暴動の指導者達にたいして公開の場で苔打ち刑が執行された。指導者の一人、メグ・バハドゥル・タパは絞首刑に処せられた。[6] それは勢いを増してきた反ラナ体制の運動にたいする見せしめの刑以外の何ものでもない。ネパールでは、「反ファシズム」戦争への協力は、「ファシズム的」抑圧体制の維持と分ちがたい形で実行されたのである。

コーハート暴動にせよ、1946年2月のインド海軍の反乱にせよ、南アジアのそれぞれの地域の兵士達が戦争と抑圧体制にたいしてもっていた意識のうえに起った出来事と見るべきであろう。

(1) Rahul Sankrityayan, *Meri Jivan-Yatra* (私の生涯の旅), *Vol. 2,* Ilahabad, 1950, pp. 564-566.

(2) Arvind N. Das, *The Republic of Bihar,* Penguin Books India, 1992, p. 41, なお、1991年のセンサスによるパトナー市の人口は約110万人である。

(3) Sachchidananda, *Census of India 1971, Series I, India, Part VI-B, Monograph No. 2, City of Patna,* New Delhi, 1978.

(4) Uprety, *op. cit.,* pp. 239-240.

(5) T. R. Vaidya, "Nepal and World War II", 14th Conference of the International Association of Historians of Asia, May 20-24, 1996, Bangkok.

(6) Uprety, *op. cit.,* pp. 200-207.

むすびに代えて—新たな時代への夜明け

「私にはあの子供がその後どうなったのかわからない。かつて何人かの革命家が訪ねて来て、私の経験・生涯について尋ねました。私の子供について聞かれたとき、私は悲嘆に暮れました。自分が犠牲にしたことについて何を語れますか。

亡くなったティガラ・サティヤナーラーヤナ・ラーオはよくこう言っていました。「我々は多くの国の歴史を読んできたが、インドでは、このテレンガーナーでは、あなたは理想、模範の女性です。どうして気を落すことがあるか。子供を譲ったことを何故悲しむのか。あなたの物語は歴史になる。」彼らはこのように慰めようとしました。でも、どうして、母の悲しみを心のなかにしまっておけますか。結局、子供は私の身体のなかで育ったのではありませんか。」[1]

第2次世界大戦後、インド各地でかつてない規模の大衆運動が、植民地支配にたいして、また、藩王国体制と地主制度にたいして展開された。1945年11月と翌年2月に起こったインド国民軍裁判に抗議する運動、1946年2月のインド海軍の反乱、おなじ年の7月の郵便・電信労働者のゼネスト、9月になって本格的に開始されたベンガルのテバガ（収穫の3分の2を農民へ）闘争などあらゆる分野に拡がり、植民地支配者だけでなく、インド国民会議派とムスリム連盟の指導層も、事態の収拾に苦しんだ。1950年9月26日、ネパール会議派が、インド・ネパール国境付近で会議を開き、ラナ体制を武力で倒すことを決定したのも、南アジアのこのような歴史の流れを意識したからである。

ハイダラーバード藩王国のテレンガーナー地方で、1946年7月4日、地主の雇った集団が農民のデモを襲撃し、アーンドラ会議の地方指導者ドッディ・コマライヤーを殺害したことを直接の契機として拡大した農民の武装蜂起は、当初、藩王国体制とその下での地主制度を攻撃対象としていたが、1948年9月18日にハイダラーバードがインドに武力統合された後には、独立後まもないインド政府と直接に対決することになった。藩王国統合の頃までに武力を通じて約4千の村を解放し、約100万エーカーの土地を農民のあいだに再分配したといわれるテレンガーナー闘争は、[2] これを指導したインド共産党が、運動を中止し、インド憲法の下での第1回総選挙（1952）に参加する決定を行うまで続いた。この農民の武装闘争については、その後長く政治的論争の対象となってきた。

ここに引用したのは、テレンガーナー闘争に参加した女性の1人、カーマランマの30年以上を経た後の苦痛に満ちた回顧である。彼女は、地域の共産党委員会の指導者達によって、「子供を誰かに譲るか、村に帰って子供と生活するか」と

問われ、子供と離れざるをえなかった。歴史が、書かれた歴史のなかに登場しなかった人々、あるいは、そのような歴史の一部になることを拒否した人々によって支えられてきたことを、この回顧は切実に物語っている。ここには、イギリスの植民地支配、それによって作り上げられた藩王国体制という二つの「近代」の重み、そして、これに抵抗する運動のなかに内在した矛盾に耐えた生涯があり、この人達はようやくみずからを語り始めている。

一方、インド独立の前夜、禁酒が州政府の政策として採用されるようになったタミルナード（当時のマドラース州）では禁酒の宣伝が歌や演劇を通して行われていた。劇の一つでは、N．S．クリシュナンの紛する不可触民指導者が「酒を飲む奴は我々のカーストから追放だ」と叫ぶと、「酒呑みを追放しなければならないのなら、高カーストに送りこもう」という答えがはね返っている。(3) カーストの掟をきびしく批判しただけでなく、独立運動のプログラムの重要な一つであった禁酒運動を生活の場で見据えたこの苦味の利いた一場面は、ここにも、もう一つの現代の夜明けがあることを伝えていた。

みずからを表現しようとする歴史は、自画礼讃や「英雄的」叙事詩に終るだけのものも多いが、語られぬ歴史の真実を鋭く描き出すこともできる。また、ジャング・バハドゥル・ラナ伝が示すように、「偉人伝」がはからずもその陰に隠れた人々の存在を映し出すこともある。

インドにおいて、歴史の一次資料を所蔵する州立文書館（アーカイブズ）を利用するための手続きは容易とはいえない。しかし、ある州立文書館の玄関脇の掲示板には、各部局の職員、館内の清掃をする人達、使い走りの仕事をする人達などすべての構成員の給与表がさりげなく貼られていた。この表から、一次資料の保存がどのような人々の労働によって支えられているかを知ることができた。歴史の真実は、館内の古びた戸棚のなかだけでなく、身近な現実のなかにも見ることができるのである。

(1) Stree Shakti Sangathan (Women's Power Organisation), '*We were making history…' -Life stories of the Women in Telengana People's Struggle,* New Delhi, 1989, pp. 50-51.

(2) C. Rajeswara Rao, *The Historic Telengana Struggle-Some Useful Lessons from Its Rich Experience,* New Delhi, 1972, pp. 14-15.

(3) K. Palaniappan, *Tamil Nadu and Prohibition of Drink,* unpublished Ph. D. Thesis, University of Madras, 1989.

Modern History of South Asia

——written history and untold history——

Sho Kuwajima

What is the correct meaning of primary sources and secondary sources? The access to official sources as the 'primary sources' is not so easy. When sources are very often closed to the public, how can we make an image of history?

In the end of 1965 I had a chance to see a drama titled "Kallol" (Roaring of the Sea) played by the Little Theatre Group at the Minerva Theatre in Calcutta. This theatre has its own history, and there I could get a glimpse of the making of an image of history by the common people.

Here in this paper, I seek to find out the undercurrent of Modern History of South Asia on the basis of materials provided by biographical writings as the 'secondary sources'. Those characters who appear in the scenes of history with the help of these writings are Maharanis who became *suttees* at the death of Jung Bahadur Rana, Muslim boys in Bengal before and after the First World War, a Japanese journalist on the occasion of the Indian Mutiny in Singapore(1915), a businessman who dared to express his idea to Chandra Shumsher frankly, women in the Reora Satyagraha of 1939 in Bihar and Telengana people's struggle after

the Second World War, Nepali soldiers who mutineered in Kohat in January 1941, rickshaw-pullers in Patna after the Secretariat firing on 11 August 1942 and others.

These people not only carefully observed the prevailing ideas and systems of the period in which they lived, but also left us most useful sources for the understanding of the problems which South Asia or Asia is presently facing.